

秩父宮台臨の感激

昭和一〇年は母校が最大の喜びと最大の悲しみに相前後して包まれた年であった。

最大の喜びとは、軍事教練査閲のための秩父宮殿下台臨である。

「査閲」も「台臨」もいまではほとんど死語に近い。「査閲」とは「成績を実際に見て調べること」、「台臨」とは「皇族のお出まし」というほどの意味である。天皇が現人神（人の姿となつてこの世に現れた神）であるとされてきた当時、直宮様（天皇じきじきの血統の宮。天皇の子や兄弟姉妹。秩父宮は昭和天皇の弟君）を母校にお迎えすることがどれほどの光栄であったか。戦後世代には想像もできない大事件であったと言つても過言ではないだろう。

この年の一〇月一日、弘前市に滞在中の大矢馬太郎盛岡市長から佐々木校長に秘親展書が届けられた。

「秩父宮殿下同妃殿下には来る一月六、七、八、九日の四日間に涉り盛岡御滞在各地御巡覧の御予定に承候処、岩手中学校へは特に御臨みなさる事に御内定相成る哉に漏れ聞き候。誠に御光栄此上もなき次第今日より折角大いに御奮励名声を中外に發揮せられん事祈上候右御内報申上候」

他の公立校を差し置いて岩手中学校が選ばれたのは、軍事教練の成績が県下一優秀であったからだ。いや、県下のみならず、第八師団管下、すなわち青森・秋田・岩手の三県のなかでも最優秀だったからである。

大矢市長からの知らせはあくまで「内報」であり、一月七日に台臨するという公式通牒は一月に入ってからであったが、新聞が一カ月もまえから書き立てたため、内報のことは生徒にも伝え、全校一丸となつて準備が進められた。

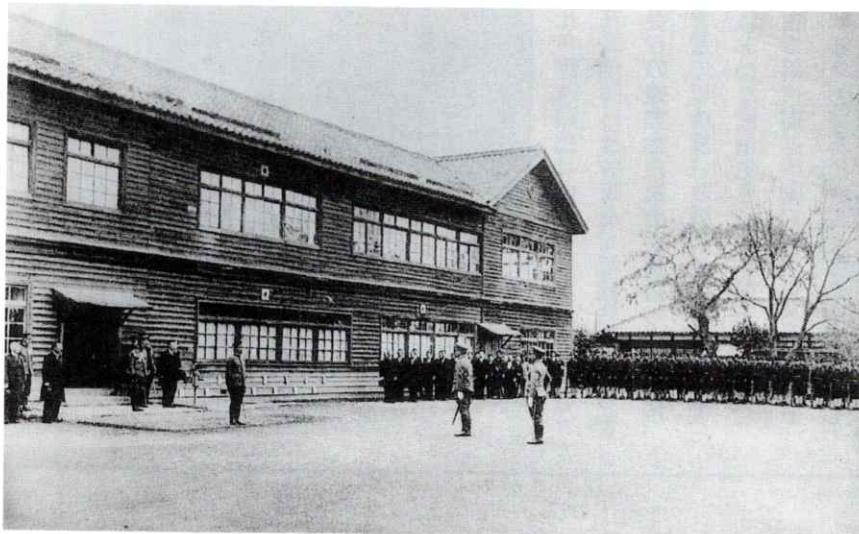
生徒は各自タワシや雑巾を持参して石鹼で校舎を磨き、一カ月のあいだに八回もの大掃除が行なわれた。すみずみまで徹底した掃除だった。校庭の枯れ木は伐採され、新しい木が植えられた。玉砂利を敷きなおし、校舎内外は面目を一新して当日を迎えた。

一月七日午後零時三〇分、職員生徒はそれぞれ奉迎の位置につき整列した。教師たちは紋付きかモーニングの正装だったが、何人かの若い教師のそれはこの日のための借り物だった。理事長・学校長・配属将校は正面玄関前に立ち、一同高鳴る胸を静め、威儀を正し、肅然としてお着きを待った。

生徒隊列の右側に位置した高橋ラツパ手が「君が代」を吹奏、続いて「捧げ銃」の号令がかげられる。やがて秩父宮殿下をお乗せした御召自動車は滑るように校門に入り、一同最敬礼のうちに玄関前に到着した。



秩父宮殿下をご先導する佐々木哲郎校長



校庭に秩父宮殿下を迎えて（昭和12年）

殿下はいとも軽やかに車を降り立たれ、理事
長・学校長・配属将校の挙手の礼を受けられる
と、ただちに学校長の先導により御休憩室にお
入りになった。

この日行われた軍事教練査閲の様子と感激を、

当時の四年生のひとりは次のような作文に残し
ている。

「……課目は進みて、我等四年生の射撃姿勢と
なりぬ。殿下は特に、我等に御目を注がせ給ひ、
終始玉歩を、こゝかしこ、と進めさせられ、我

等生徒の為す技を、常に、玉顔御うるはしく、
台覧あらせ給ひぬ。おゝこの辺鄙の地に、金枝
玉葉の御方を迎へ奉りたるは、何たる光栄ぞ、
我生けるしるし有り」